

国際研究プロジェクトの進展状況

報告者 センター助教授 恒 吉 僚 子

子どもの学力をどのように理解し、それを支援するのか。また、21世紀において、どのような学びを学校や家庭、地域など、子どもを取り巻く社会化の場が提供すべきなのか。学力をどう定義するかから、授業や評価、学習を支える連携の体制まで、各国で盛んに議論が行われている。学校臨床センターでは、基礎学力研究開発センターと共に、今年度から3年間の計画で、子どもの学習とそれを支える仕組み作りを国際的な見地から再検討する研究を進めてきた。今日、世界が大きく変わる中で、日本が直面している課題の多くは、諸外国においても共通課題となっている。日本の教育を、世界の中に位置付けて議論する、諸外国との比較を通して日本を見る視点を多角化していく作業は、今まで以上に有用になっている。

各国で数学などの点数でランク付けした国際テストの結果は、しばしば諸外国の政策関係者の大きな関心事となり、時としてセンセーショナルに社会問題化してきた。グローバル競争の勝者となるべく、学力向上を意識した教育改革が、様々な形で各国で展開している。しかし、他方では、従来の学力観を問い直し、考える力や問題解決能力をも含んだ、21世紀型学力を推進、評価しようとする動きも見られる。

こうしたテーマを考えるにあたって、今年度センターでは、自治体と共に保護者、教師、児童生徒の国内アンケート調査の実施(別記)、と共に、教師、保護者の生の声を汲み取ろうとする、国際比較視点からのビデオインタビュー調査を行いつつある。

本ビデオ・インタビュー調査では算数と社会科などの授業場面を視覚的的刺激剤として日本語、中国語と英語とで用意し、それを来年度から日本、アメリカ、シンガポール、中国を射程に入れながら教師と保護者に対して行おうとするものである。J.トビンらが、日本、中国とアメリカの保育園に関わる教師意識を引き出すために保育園の通常の様子を見せた手法 (*Preschools in Three Cultures*, Yale University Press) に近いが、本研究の特徴としては、“学力”を軸として、目的志向的にいくつかの代表的な学力観を背景にした実践を見せていること、日米中の映像を、学力を柱に一本のビデオにおさめている

ことであろう。

ビデオは二本用意し、現在、基礎学力研究開発センターと共に、授業場面を撮影、編集する作業を行なっている。異なるビデオを二本用意する理由としては、視点を多様化することによって、学力をより多角的に捉えることができると思ったからである。小学校5年の教師と保護者を対象としている。

教科としてはビデオ1は算数を、ビデオ2は社会科・ランゲージ・アーツ、日本の総合に焦点を当てている。いずれの教科、活動においても、基礎学力と21世紀型の“考える力”の双方が射程に入っている。例えば、数学では計算力などの基礎的なスキルの習得場面、問題解決的授業や少人数指導・習熟度指導がバランスされて一本にまとめられる予定である。

ビデオ内容はコンセプトと共に、現在、海外協力者と共に議論、整理中である。これらのビデオはそれ自体が分析の一次的対象として位置付けられるのではなく、ビデオ・インタビューのレスポンスを引き出す素材として位置付けられている。つまり、後者が主たる分析対象である。しかしながら、自ずから、見せられた映像によって、レスポンスする方向性や内容が影響されるため、ビデオ内容のバイアスなどをもプレテストをして検討するつもりである。

ビデオ・インタビューは基本的に6人のグループ・インタビューが検討されている。あらかじめ、学力観、指導や学校の役割に関連する質問、家庭と学校との連携に関わる質問をビデオ・インタビュー後に簡単な質問紙に答えていただき、インタビューが行われる。また、ビデオ・インタビューの場面自体を、分析の対象として、可能な場合は映像に撮影することを検討している。

日本側プロジェクト・メンバー

恒 吉 僚 子 (学校臨床センター, 東京大学)

秋田喜代美 (学校臨床センター, 東京大学)

藤 村 宣 之 (センター協力研究員, 埼玉大学)

村 瀬 公 胤 (基礎学力研究開発センター, 研究員)

中 柴 春 乃 (基礎学力研究開発センター, 研究員)

代 玉 (東京大学大学院)

アメリカ側プロジェクト・メンバー

バーバラ・フィンケルスタイン (メリーランド大学)

キャサリン・ルイス (ミルズ・カレッジ)

クリストファー・ビョーク (ヴァッサー・カレッジ)

中国側プロジェクト・メンバー

鄭太年 (華東師範大学教育課程研究センター)

シンガポール側プロジェクト・メンバー

クリスティン・リー (国立教育研究所)

また、学力低下論争など、国内においては揺れている「日本の学力」であるが、実は、国際テストなどの高得

点を背景に、日本の初等・中等教育への国際的評価は高い。日本の教育の強さや弱さは国際的に見れば何だったのか。日本の教育を外から再検討するプロセスとして、本年度の臨床センターの客員教授でもあり、また、上記共同研究者でもあるC. ルイス (ミルズ・カレッジ)、C. ビョーク (ヴァッサー・カレッジ)、及び、タン・パイ・サン(東京大学博士課程)、恒吉により、外から日本を分析するパネルをアメリカのアジア学会 (Association for Asian Studies) で2004年3月に組んだ (学校臨床センター、基礎学力研究開発センターから報告書発行)。